

# 愛しき者へ

下

中野重治

解説 澤地久枝





# 愛しき者へ

下

中野重治

中央公論社

愛しき者へ 下

定価一八〇〇円

©一九八四

昭和五十九年四月二十日初版印刷  
昭和五十九年四月三十日初版発行

著者 中野重治

発行者 嶋中鵬二

印刷 精興社  
製本 大口製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八-七

振替 東京二二三四

検印廃止

ISBN4-12-001281-6

# 目次

上巻につづけて

澤地久枝

7

一九三五年（昭和十年）

13

一九三六年（昭和十一年）

26

一九三七年（昭和十二年）

60

一九三八年（昭和十三年）

94

一九三九年（昭和十四年）

153

一九四〇年（昭和十五年）

174

一九四一年（昭和十六年）

185

一九四二年（昭和十七年）

226

一九四三年（昭和十八年）

300

一九四四年（昭和十九年）

318

一九四五年（昭和二十年）

345

一九四六年（昭和二十一年）

402

一九四七年（昭和二十二年）

422

一九四八年（昭和二十三年）

436

一九四九年（昭和二十四年）

467

一九五〇年（昭和二十五年）

475

解説 澤地久枝

|     |     |
|-----|-----|
| 278 | 26  |
| 295 | 61  |
| 300 | 70  |
| 306 | 94  |
| 312 | 105 |
| 318 | 164 |
| 327 | 176 |
| 340 | 185 |
| 350 | 205 |
| 366 | 207 |
| 399 | 224 |
| 402 | 228 |

あとがき

澤地久枝

483

愛しき者へ

下





上巻につづけて

澤地久枝

この巻には、「上巻」にひきつづき、一九三五年（昭和十年）から一九五〇年（昭和二十五年）までの、中野重治が妻や両親、妹たちへあてて書いた未発表書簡三百三十一通をおさめる。

「上巻」とおなじく、全文をおこした。「上巻」の場合、ごく一部分が生前活字になっている。しかし、「下巻」におさめる書簡は、中野さんの生前にはまったく公けになることはなかったものである。

すでに満州事変はひきおこされ、「満州国」はでき、中野さん自身が政治運動を自ら封印し、「転向」者として辛うじて獄外の生活をかち得ていた時代、日中戦争から英米を相手とする全面的な戦争へと傾斜してゆく時代が背景にある。

敗戦にいたるまでの十年間、執筆禁止という糧道断ちの処分があり、軍隊への召集もある。

戦争下の閉塞された社会にあつては、年来の同志や友人とのつきあいも微妙になり、心を許せるのはごく限られた相手だけになってゆく。中野さんの手紙の過半は、妻にあてたものである。

「上巻」の場合、百六十七通のうち百四十六通が獄中からの手紙であった。豊多摩刑務所の独房から、司直の検閲にさらされ、許可を得てはじめて届く手紙である。抹消もされ、不許可になったまま行方知れずになった書簡もある。

この強いられた状況は、中野さんの獄中信に嚙んでふくめるような周到な表現をのこした。第三者が時間をへだてて読んでも、ほとんど読みちがえる心配のない文面になっている。夫妻の結婚歴は浅く、獄の内と外にひきさかれて暮した時間の方が圧倒的に長いこともあって、夫婦の間にあっても「省略」や「比喩」では用が足りない事情もあった。

「下巻」には、獄中からの書簡は一通もない。身柄を拘束される事態は起きなかった。結婚生活も次第に日を重ね、日常的な出来事や密室の会話の延長の上に書かれた手紙が多くなってゆく。

もはや「奴隸の言葉」を必要としないかわりに、少々の補注では事情がわからず、また注記などのほどこしやうのない書簡の多いことが「下巻」の書簡の特徴である。もちろん、召集・入隊にあたつての「遺言」をはじめ、誤解の余地の一分もない手紙はある。また、軍隊からの発信は検閲印をおされ、敗戦後の文通は、占領軍によって公然と開封されるという事態も通っている。だが、刑務所から書かれた書簡とは比べようもない。ほとんどの手紙は、「昨日の会話」を受けた平常の書簡である。

事情に通じた者同士の諒解を前提とする「私信」の公刊にとつてのさいわいは、中野書簡と対<sup>たい</sup>をなす家族から中野さんあての手紙が、数多く保存されていたことである。行きつ戻りつの手紙はおのずから往復書簡となり、時をおいての手紙である場合も、中野書簡の文意をくつきりと明確にするあわせ鏡のような位置を占めている。

いずれも長い歲月の間にいたみ、水ににじみ、あるいはネズミにかじられて十全の保存状態ではない。水につかったあと、乾く過程で板になってしまい、ついにひろげられない何通かの手紙がある。

言葉ひとつを読む上で貴重な家族からの手紙は、中野書簡を明瞭にし、より生き生きさせる目的にしばって選り、多くは割愛した。読み違ひのないように、行間に沈めた感じである。

さらになお、明らかに失われている中野書簡や、家族から中野重治あてに書かれた手紙がみつかることがあるかも知れない。「未発見」の書簡の数はごく限定されているが、まだ発見される余地のあること、むしろ出て

きてほしいという願望をここに書いておきたいと思う。その前提をおいた上で、『愛しき者へ』上・下巻に中野重治の全未発表書簡を収録し得たと言うことを許されたい。

「下巻」では、中野書簡一通ずつに固有の通し番号をつけ、それと対になっている家族からの手紙は、同じ番号の1もしくは2というように表記してならべ、一連のものであることを示してある。

世間一般の結婚生活で、これほど数多く、これほどこまやかに、そしてきわめて率直、大胆な手紙が多年にわたって書かれるという例は、きわめてめずらしいことではないだろうか。

中野さんの郷里・福井県坂井郡高柳村一本田と、原さんの郷里・島根県松江市東本町。夫妻はそれぞれに郷里へ帰ることで別居したし、舞台・映画・ラジオに出演するべく大阪をはじめ地方へ出る妻と、東京にのこる夫という別居もあった。原さんの転地療養があり、留置場暮らしもある。

一つ屋根の下で暮せない日々、中野さんはまめに手紙を書く。原さんも書く。結婚当初、妻の「筆不精」に獄中で地団駄踏んでいた中野さんは、妻からの「いい手紙」や「いいあいさつ」をもらう。そういう夫と妻へと変っていった。

これらの家族あて未発表書簡のなかに、素のままの中野重治が姿を見せ、中野重治をとりかこんでいた人間関係も如実に見えてくるところがある。

出獄した一九三四年の大晦日、「早くどこかへ落着きたい。大木戸ハウスで夏を過すようだ」と死んだ方がいい（三四年七月三日、政野から重治への手紙）というすまいから、夫妻は淀橋区（現新宿区）柏木五ノ一二三〇へ転居した。二階造りの二軒長屋の一軒で、階下はほとんど陽の目みずの借家だったが、やっと夫婦らしい生活がはじまった。

中野重治は「転向」者であり執行猶予の境遇にあって、時の流れに鋭く斬りこむ多くの評論を書いてゆく。天皇機関説問題をえぐった文章をのせた雑誌は、検閲で中野の原稿の全文を削除された。二十八巻本全集（筑摩書

房刊)収録の作品を、その執筆時期にしたがって読んでゆくと、慎重に大胆に書き得る領域をひろげていった中野さんの姿勢が身近かに感じられてくる。

戦争が全面的となり、保守的な自由主義者の言論も封じる世相となったとき、生活は家族ごとにバラバラにいとまざるを得なくなった。空襲からの避難や疎開、食糧の調達などは、家族内で解決するべき問題になり、家や家族とのつながりは避けがたくつよくなってゆく。

一九三五年には、誕生日がくると中野さんは三十三歳になり、原さんは三十歳になる。一本田で農業をいとまむ父藤作六十九歳、家つき娘である母とら六十二歳、二度の結婚に破れ、一本田と東京の中野宅をゆききしながら詩を書く妹の鈴子二十九歳、末妹美代子二十二歳。藤作・とら夫妻は長男耕一・次女はまをを二十代の若さでうしない、重治は一家の跡とり息子である。美代子は兄夫婦とおなじ一九三〇年に結婚し、長女清美を生んでいるが、やがて離婚の避けがたい生活を送っている。

原さんの側では生母セツ(旧姓的早)は早くに亡くなり、父原金三郎五十二歳、継母千代四十三歳、母ちがいの妹一人、弟四人が松江に住む。末弟は一九二八年の生れで、この年の春、小学校へあがる。

セツは政野の下に喜久子、喜美子の二人の娘を生んでいる。政野が上京後よびよせたこの妹たちは結婚し、田端と横浜で暮している。

夫妻は一九三九年に長女卯女<sup>うめ</sup>の誕生で親となり、一九四一年、父中野藤作の死に出会う。この父親の手紙は、日本の家と農村の風土の重さに耐えている男の生涯を感じさせ、中野重治にとっての「家」および「家族」の根をひらいてみせるようなところがある。それで、藤作の手紙は、極力採録するようにした。

中野重治の「転向」出獄に対し、きびしい批判をした父親は、小説「村の家」に描かれ、現実にはほとんど同じ会話がかわされたことは「上巻」でふれた。

「村の家」は一九三五年四月に執筆されて、日本評論社の「経済往来」五月号に掲載されたが、藤作の読後感が

重治あての手紙（五月八日）にのこされている。

「五月号『経済往来』を買って読みましたが、父が豪傑すぎて他人にはちょっと見せにくいから、その分だけ切取って他人へ貸すことにした。いわゆる発禁の形です。

三、四月号の『社会評論』ももらいました。

父母とも元気ですが、農事多忙で終日野良です。――略――」

中野さんの「日記」がのこされている年は、手紙と日記がたがい補完しあう関係にある。夫としての中野重治は、ときに二つの顔を見せ、「日記」は中野さんの内面の吐露、「ぼやき帳」の感もある。「どちらもほんとう」というのが原さんの評である。「日記」と家族からの手紙を正確な位置におけるように努めた。ここには、中野書簡を主軸として、第三者の余分な注などいっさい抜きに、おのずから再現されてゆく生活がある。

この「下巻」によって、凍えるような風雪の時代、いつ果てるとも予測しがたい暗黒の社会にあっての一組の夫婦の姿が、文字通り虚飾なく赤裸々になる。中野重治の資質、感性と向きあって、凍としてひびき返すものを妻がもっていたことが、この書簡の世界を成立させた。選ばれた男と女であったことが、よき日も悪しく苦しい日もともに生きのびさせ、生涯の夫婦となる。時代、世相、そして結婚の内実への証言性はおのずからの帰結としてこの書簡に宿っている。

一九三五年の手紙は、郷里松江滞在中の妻にあてた愛の便りからはじまる。丈夫が自慢だった原さんの健康にかげりがみえはじめ、原さんは新協劇団から休暇をとった。夫を柏木の家へのこし、七月二十八日朝に松江へ着く山陰線で旅立ったところである。

本文は新字新かなづかいに統一し、明らかな誤字・脱字や誤記は訂正してある。

書簡の破損、水濡れなどで文字が判読できない箇所は、欠字のあることを明らかにした。発信ならびに着信の住所は、初出のみに記すことを原則としたが、家族よりの書簡を挿入した際は、改めて記した。なお、同じ住所が再度出てくる場合は、住所の一部を省略した。

文字を補う必要のあるところは「」のなかに注記し、また最少限の注をつけた。さらに読みにくい漢字の一部は平がなになおし、長文のものには改行をほどこし、句読点を補い、なるべく読みやすいように手を入れた。

書簡番号は、中野重治書簡を上巻よりの通し番号とし、家族よりの書簡を挿入した場合、対応する通し番号に1-2の如く加え、書簡日付の下に発信者の名を太文字で記した。

一九三五年（昭和十年）

168

原まさの〔政野〕へ

八月一日

東京市淀橋区柏木五ノ一三〇より松  
江市東本町五丁目一七〇原金三郎方へ

ハガキ見た。昨日洗濯物など送った。今日明日中に靴その他おくる。眉エンピツも買って来た。アメリカのがなかったのでドイツのを買って来た。シュテットラという会社。小学校の時この会社のエンピツを使ったことがある。

じつに暑い。ことに昨夜は風まったくなく、しかも湿度高く、閉口した。石堂〔清倫〕に会った。彼は爺さんが全部で六十円払ったようにいってたが、前の十円も入れて五十円だったのじゃないかね？ また秋に仕事があ

りそうだと。それからあの爺さんに暑中見舞のハガキを出しておいてくれといっていたが、どうでもいいだろう。出さんでもいいと思うが、石堂の言葉を伝えてだけおく。

今日からやっと仕事にかかる。今村〔恒夫〕はまだここにいて、大分せっつかれてるらしい。大阪行きで留守中の今村たすける会はテンボが大分のろかったらしい。しかし心配の必要なし。はだかで暮すのはいいが腹をこわさぬよう。多分もう会ったかと思うがこんな手紙が来ていたから同封する〔所在不明〕。お前さんの方が十日早く田舎へ帰ったのだから俺の方もなるべく早く切り上げるようにしたい。俺は十日頃まで東京にいるつもりだ。一本田へよるよらぬは別として帰りはいっしょに帰ろう。



お父さんに近く手紙をかくが、必ず忘れずに今日、よろしくといって来たとお伝えして下さい。

からだを休めるのが大事だが精神的緊張を失わぬようあまりお喋りをせぬこと。本は『演出者の手記』の方は聞かねばならぬので二、三日おくれると思う。

なるべく静かにしてるといい。暇に手習いでもするかね。いま十二時で笛が鳴っている。カンナはまだ咲かない。しかし大分大きく太くなった。色も黒っぽく。

冒険をして水へはいってはいけないよ。今年だけ我慢しなさい。

八月一日

重治

まさのどの

〔欄外〕黒エンピツのさが折れているがこれ一本しかなかったのだ。

(1) 政野が松江から発送を頼んできた品の一部。子供のころガラスで大怪我して眉毛が途中で切れ、眉墨でおぎなっていた。

(2) 四高時代からの友人石堂清倫は当時日本評論社の編集者。

「爺さん」というのは、「朝日新聞」出身のジャーナリスト杉村楚人冠で、杉村の著書『続々湖畔吟』が日本評論社から出版されるので(六月十九日刊)、石堂は杉村に「女性で優秀な人がいるから校正をやらせてくれませんか」と頼み、仕事のない中野家へも

ってきた。中野に教えられながら、校正の経験のまったくない政野がゲラに朱を入れたという。杉村は事情を察していながらにも言わず、世間相場以上の校正料を払った。(3) 詩人今村恒夫は地下活動中の三三年二月、小林多喜二といっしょに逮捕され、拷問によって左足が不具になった。三五年五月十二日、予審もすまぬまま結核の病状悪化により豊多摩刑務所を執行停止で出された。身元引受人は作家の細田民樹で、当初の療養費はかつての日本プロレタリア作家同盟の関係者や読者の寄金でまかなわれた。執行停止の身であることが、施療病院へはいることを妨げていること、五銭、十銭という単位もある寄金の状況などが、「文藝評論」へ寄稿した中野の呼びかけによってあきらかである。「今村恒夫を援助する会」の宛先は柏木の中野宅、実務は政野の仕事でもあった。今村は病院を転々とし、三六年四月に郷里の福岡県へ帰り、十二月九日、二十八歳で亡くなる。

169 原まさのへ (消印八月二日、はがき)

ハガキきました。ただいま古靴、ラックス二本、まゆエンピツ二本およびブドフキンの俳優論を送りました。

御両親様はじめの早(政野の母の実家)様にもよろしく伝えて下さい。こちらは非常にあつい。今日はすこし曇り気味でまだしもいいくらいですが、みぎ取りあえず。

いつかの松葉菊はとなりのニワトリが食べてしまった。あの葉がうまいのらしい。窪川(鶴次郎・稲子)のところ